



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	済州オルレを通じたコミュニティービジネス
Author(s)	安, 殷周
Relation	歩く滞在交流型観光の新展開 The New Development through Extended Stay and Interactions with Locals in Walking Tourism
Citation	CATS 叢書, 12, 47-68
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73761
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS12_8.pdf



済州オルレを通じたコミュニティビジネス

安 殷周（アン・ウンジュ）

社団法人済州オルレ事務局長

こんにちは、私は安です。よろしくお願いします。これは済州島の地図で、香川県とほぼ同じ大きさの島です。韓国の最南端の島で、最も韓国人が住みたいと思っている島です。済州オルレコースは、島に沿って歩く長距離徒歩旅行のコースです。

2007 年、理事長の徐明淑（ソ・ミョンスク）がスペインのサンティアゴの道を歩いて、とても良かったので韓国でもこういう道があったらいいなと構想を作ったのが最初です。理事長は済州島で生まれましたが、大学はソウルに行き、記者を 22 年間して、済州島のことは忘れていました。生きるために一生懸命な韓国の女性記者でした。22 年の記者生活の中で、とてもストレスを受けていて、このままだと私はもう死んでしまうと思って、辞表を出して、サンティアゴの道へ歩きにいきました。800km を歩いて、30 日間でしたけれども、自分が新しく生まれ変わるのを人生ではじめて感じました。韓国人は目標中心で競争しながら生きています。それを歩きながら理事長は感じ、自分のことを振り返る必要が韓国人にはあると感じて道を作ることになりました。

理事長はまったく民間の人だったから、官が道を作るときのように計画や予算を立てたりしていませんでした。最初は自分の退職金 300 万円で案内板を作ればトレイルを作れるのではないかと簡単に考えていました。スペインは黄色のペンキで矢印を書いていて、貝の形をしています。そのように済州島も青い色で標識を作ればできるのではないかと思ったのです。最初は自分のお金で、ボランティアの人にご飯やお酒をごちそうしたりして標識をかけながら道を作りました。この写真のように標識をおけない区間が出てきました。そのときに文房具屋でリボンを買って、青いリボンを枝とかにぶら下げながらコースを作っていました。最初は矢印ではじまって、リボンになって、右側にある標識、青いのが見えていますがそれが今の標識です。この道を歩いた人たちが、その標識を見ながら歩く人が少しずつ増え、オルレコースっていいね、幸せだったねと少しずつクチコミで広がっていきました。

オルレコースはこのように海を通ることもあります。低い山を登ることもあります。ここは畑の道です。理事長がはじめてコースを作るときには、サンティアゴで感じたようにコースを作ればいいと思っていました。長く歩くためにはできるだけアスファルトの道を避けること。昔、済州島の人が使っていた道、車が通るようになって通らなくなった失った道を探すこと。新しいコースを作るときは、既存の道を使うこともあります。まったく新しい道を探してつなぐこともあります。そのコースを作る際は、土木工事をするのでは

なく、草刈りをして人が通れるように道を作ります。新しいコースをつくるときは、ボランティアの人の力を借ります。理事長がオルレを始めるときは、お金を持っていなかったのので、手伝ってくれるボランティアがいなかったらコースは作れませんでした。良かったのかどうかわからなかったけれど、理事長には弟が2人いて、1人は済州島でいわゆるやくざでして。有名なやくざだったので、村々に知っている人が1人はいました。もう足を洗っているの心配はしないでください。姉の仕事を手伝うためということでそういうことができました。済州オルレは425kmありますが、30%が私有地です。その私有地の方たちを説得するには、やくざの弟の力が大変役に立ちました。もちろん力任せでなく、ネットワークの力です。最初は弟の力を借りて、それからボランティアの方の力を借りてコースを探し始めました。

人々がコースを歩くようになっていたら、私たちもこのコースを作るのに少しでも力を貸さなければならないと自然と心ができるようになっていました。理事長は計画性がまったくない人ですが、みんなが自発的に本当に楽しく、それぞれが自分の才能を発揮してもらえるようみなさんを説得することは天から才をもらっている人です。ある日、軍隊の隊長がオルレのコースを歩きました。そのコースがとてもよく、大変気に入ってようだったので、隊長を道へつれていきました。これから必要なときは軍人たちがコースを作ってほしいと考えました。軍隊を連れてやってきました。軍人は世の中に平和をもたらす人、軍人たちがオルレコースに平和をもたらしてほしいとお願いしました。最初は軍隊の隊長は人の手でできることができませんと言っていました。理事長は説得して、おぼけをつかまえるのが軍人でしょ、このような仕事はもちろんできるわけでしょと説得しました。その軍隊の隊長はプライドを傷つけられ、帰って考えてから答え出しますと答えました。理事長のもう一つの才能は、お金を使わず言葉でその人に仕事をさせる、サンキュー領収書を書くのがとても上手な人です。それでその軍人たちがコースを作ってくれたので、海兵隊の道というお金がかからない領収書を書いてあげました。そのあとは、ほかの軍隊からもこの仕事に参加させてほしいと声がかかるように、力を貸してくれるようになりました。だから、オルレコースには軍人たちが作ってくれたコースが何か所かあります。このように軍人たちが手伝ってくれ、歩く人たちも増えていきました。1年間まったく観光客がこなかったようなところも、田舎の村々も、コースを作ることで人が歩きにきました。道ができることによって、村の人たちが私たちのところにも道を作ってとお願いしくるようになりました。ある村は道を全部自分たちで探しておいて、オルレは矢印をかけるだけでいいよと言ってきたところもありました。

最初は理事長が425kmの道を完成させたのですが、それには軍人の力、村の人の力、ボランティアの力があつたからコースができました。済州オルレができてから、韓国はもちろん済州の文化がまったくかわることになりました。昔、済州オルレができるまでは、一度島へ来た人がリピーターとして来る期間は2〜3年に1回だったが、オルレができてからは1年に2回訪問してくれるようになりました。済州オルレができる前は、済州島はレン

タカーで2泊3日でまわる観光地という認識でした。またオルレができる前は、空港におりたら、東まわりに1周、西まわりに1周、ハルラ山という高い山があり、そこを登れば、また誰かに濟州へ遊びに行こうよと言われても、レンタカーで周った人は私はもう濟州を全部まわったから行くことないよといわれるというのが濟州の観光の当たり前になっていました。

今は濟州オルレで濟州島を旅行するにはどれくらいかかるのでしょうか。1カ月かかるのです。濟州オルレには今26コースあります。1コース歩くのに1日かかります。さらに島のコースもあります。最低1カ月かかります。だから、1か月間滞在するか、1カ月くらいの期間を何回かに分けて訪れなければなりません。だから、オルレのあとの濟州島には長く滞在する人が増え、何回も何回も人が来る島になりました。オルレを歩いた方たちが口をそろえて、「オルレを歩いて一番よかったのは、また来たいと思わせてくれたのは、コースではなく人だ」と言っています。最初は風景がよいので濟州オルレに来ました、そのあとは地域の人たち、ゲストハウスやホテルの人たち、自分が乗ったバスのドライバーの人たちが親切で感動を受けたとか言っています。また、みかん畑やにんじん畑を通るのですが、畑の方が、みかんをどうぞとくれたりするので、オルレに感動するわけです。昔、濟州島に車で旅行した人は、観光地を点と点でただ回っていて、濟州島はぼったくりの島、不親切な島というイメージを持っていました。だけど、歩いて濟州島を旅行するようになって、濟州島の人はこのように温かい人だったのですねとあらためて感じるようになったのです。前に濟州島に10回以上来たという人も、オルレの1コースを歩いたら、本当の濟州に出合ったとびっくりして感動していました。

これは、韓国のカード会社が分析した資料なのですが、オルレコースができるまでは、濟州島では2つの大きな都市でしか消費がありませんでした。オルレができてからは、島の隅々まで、田舎まで消費が行われているのがわかる表となっています。最初オルレコースを作るときは、離れている自然と文化を線にすれば、それをコースにすればいいなという思いで道を作ったのですが、これが線になったら島全体が活性化してきたのです。最初、私たちは歩く人たちが幸せになる道を作るのが目的でした。そのあと、コースができることによって村の中に入るようになったんですね。その村の人たちに出会ったあとは、地域の人たちも幸せになることが私たちの目的に入りました。いくら風景がいいところでも、人が不親切で仲良くなれなかったら、次にいい感情を持たなくなります。オルレコースができたところは、旅行者が来たときに温かいもてなし、交流ができることこそが、長く生き続けられるコースになるのではないかなと思いました。だから、この道の地域の人たちに何をしてあげられるか、プライドも経済的効果もありますが、村の人たちに私たちが何をしなければならぬかを考える時期になりました。それで、歩きにくる人たちをその住民が一体になってもてなす祭りをおこなう、ウォーキングフェスティバルを行うことになりました。それで地域の人たちは、公演とか伝統文化とか食べ物を用意します。歩きに来た人はそれを買って食べますし、公演を感動して見ます。2010年から1のコースから毎

年このウォーキングフェスティバルを行っています。これに参加するために済州島を訪れる外国人もたくさんいます。このフェスに参加するため、日本、香港、中国、台湾、シンガポールから毎年秋に訪れてくれます。村の人たちは、この祭りについてこういうふうの評価しています。「私たちは小さな村なのに、海外や韓国内から 3000 人くらいが参加するんですけど、みんなが私たちが作った食べものを美味しくいただいて、子どもたちが準備した公演も感動しながら見てくれて、こんな小さな町にみなさんが来てくれるなんて」と喜んでいます。今年は 11 月の 1、2、3 日で予定しています。こちらにいらっしゃる皆さんも遊びに来てください。

済州オルレが今までやってきたプロジェクトは、だいたいお金もないし、人もいないから、頭を使ってやってきたことが多いです。この済州オルレのアカデミーもこのように作ってきたものです。韓国の社会はとても小さいので、1 人経て向こうの相手はだいたい VIP なんですね。理事長と私は長い期間ソウルで記者をしていたので、道を作るために済州に来たら、「私の知り合いが済州を歩きたいというから案内してくれる？」といういろいろな方から連絡がきます。接待オルレをしてくれというお願いです。それで私たちはたくさんでかけました。接待オルレをたくさんすると、本来の業務ができなくなったので、最初はボランティアにお願いしました。ところがボランティアの人たちも、もともとと生業があるから、仕事を差し置いて何回もお願いすることはできなくなりました。そこでその接待オルレを有料化したらいいのではないかと思ったので、ボランティアの人たちを教育してその人たちがお金をもらってガイドできるようにしたのが、このオルレアカデミーです。無料のボランティアでコース案内する場合は、知識がなくても道さえ歩けばいいという感じですが、お金をもらうのであれば知識で武装しなければなりません。だからその人たちを教育するときには、ほぼ観光ガイドのように知識を詰め込みます。2009 年から取り組みはじまったのですけれども、アカデミーを終了した人は 1,300 人になります。このアカデミーで皆さんが欲しいと思っていたのは、ただ有料ガイドになるためだけでなく、済州島のことをもっと知りたいという方で、そういう人がどんどん増えていきました。最初は有料ガイドを育てるためにはじめたアカデミーですが、今は済州オルレ本体のボランティアをするための教育するプログラムに変換しました。最初はこのアカデミーを終了した人たちのうち何人かだけが有料ボランティアガイドに。それ以外の人はどこへ行ったか分からなかったです。2013 年だったのですが、アカデミー終了した人は 600 人くらいだったけど、この人たちがどこかへいくのはもったいないなと思っていました。アカデミーを終了したのに、ただ有料ガイドだけをするのはもったいないなと思い、みんな集めて同窓会をしようと計画しました。そのお知らせを出したら、70 人くらい集まって同窓会を行いました。組織を作ると、組織固有のミッションがないと組織がまわっていかない。その同窓会のみなさんにミッションをお願いしたのは、済州オルレにたくさんの方が歩きにきますが、まだ 1 人で歩けない、初めて歩く、女性 1 人で歩けないという人のために、同窓会の人たちに 1 コースを無料で一緒に歩いてくれないかと提案しました。今でもやっているのですが、同

窓会の人が毎日毎日、あるコースではアカデミーボランティアと歩く濟州オルレとして行ってくれています。1人で来た人、女性1人の人、初めてきた人とかは、ホームページにそのことが載っているので、そのコースに9時半にきて、アカデミーボランティアの方が説明したり、どのように歩いたらいいかを伝えながら歩くことができます。

また、このアカデミーを終了したボランティアたちが主になりやっているのは、毎月第2週土曜のクリーンオルレです。歩きながらゴミ拾いをします。札幌はどういう場所かよく分からないけれども、濟州の場合は中国から流れ着く海洋ゴミがとて多いんです。九州オルレに行ったら、そこには韓国からの海洋ゴミが流れ着いていました。本当に恥ずかしくて、ごめんなさいとお詫びしました。すると、そのとき誰かが言ってくれました。日本人が捨てたごみはハワイに行くと。この海洋ゴミを歩きながら拾うのがオルレコースの宿題でした。それで、西帰浦（ソギポ）市の行政のほうに提案をさせてもらった。ゴミ袋を用意してくれたら、私たちが歩きながら海洋ゴミをいつも掃除しますと。その行政の方は最初反対していました。一般の島の人たちはゴミ袋が有料なのに、なんで旅行者たちに無料でゴミ袋を配らなければならないのかと。そのときに、行政を説得するため、旅行者がゴミ拾いすると住民もゴミを道端にすてなくなるし、また行政もゴミを拾うためにお金を使う必要がない、全体に良い効果があると説得したんですね。実際に濟州島のほうで、この効果を測定するために分析をしました。クリーンオルレを10コースでやっているんだけど、西帰浦の市役所で、11年間12人雇わないと海洋ゴミを処理できないと分かったんですね。最初はボランティアによってクリーンオルレをしていたのですが、今年からは、行政のほうからクリーンリーダーといってゴミを拾う人、オルレを守る人といってコースを整備する人を地域のシニアの人を雇う、仕事として活用できるようになりました。

これは何だと思いませんか？ 何に見えますか？ときどき犬に見えるという人もいますが、象徴するロゴが馬です。濟州島は野生の仔馬が有名なところですよ。性格がゆったりしていて、ゆっくり歩くんです。ゆっくり自分のペースで、なまけながらこの道を歩いてほしいと理事長が馬をロゴに表しました。この馬が、標識でも記念品でも使われています。最初、理事長は自分のお金を崩してやっていたんですが、あっという間になくなり、道端で生活しなければならぬくらいになっていたんです。私はソウルでそのとき記者をしていたんですけど、理事長が資金がなくなってもうすぐホームレスになってしまうのではないかと、危機感をもって濟州島へ来ました。最初は歩く人たちが寄付をして、道を管理できるようにシステムを作ろうと思って濟州島へ来ました。最初は、こういうシステムを作って、1人1,000円、2,000円を寄付するシステムを作りました。また、コース沿いにある小さな店やカフェとかレストラン、ゲストハウスとかがオルレコースができたから儲かるようになったよと後援金を出してくれるようになりました。韓国には「涙の効果は3年しかない」ということわざがあります。ありがたいと思って出したお金も3年以上は続かないという意味なんです。そしたら私たちは3年経ったらまたホームレスになってしまうというわけです。だから、自分でビジネスモデルを作らないと運営管理することはできない

と思いました。それで考えたのが、旅行に来た人たちが買っていく記念品を作ろうというビジネスモデルでした。済州オルレの記念品なら、環境に優しくないといけなし、ベトナムや中国で作ったものを売るのをおかしいと思っていました。それで考えたのは、済州島の女性たちが古い布やぎれを活用してこのような人形を作ろうというふうに思いました。これはたぶん、こどもの服で作ったと思います。これは古いカーテンの生地で作ったと思います。カンセ人形を作る女性が15人くらいいるのですが、これを作ることで新しい職業を彼女たちは手にいれました。また済州島オルレは、この人形を売ること、コースの運営管理できる資金を獲得することができるようになりました。最初は済州島の女性たちが集まって人形を作っていましたが、今は多文化女性といって、韓国にお嫁にきた海外の女性たちも加わるようになりました。また、今年からは障がい者の方も作業に加わる予定になっています。カンセ人形だけでなく、このようなほかの記念品を私たちが作って、これらからも半分くらいのお金を管理運営に使っています。一番左にあるのが済州オルレのパスポートです。パスポートにスタート地点、中間地点、フィニッシュ地点の3個のスタンプを集めると、そのコースを歩いたということで、これを26個全部集めると完走のメダルと完走証をお渡ししています。425km全部歩いた人が1年で平均700人くらいいらっしゃいます。その中には日本人の方やカナダなど外国人の方も結構いらっしゃいます。

私たちはコースを歩く人たちがまず幸せでなければいけない、道を提供してくれた地域の人たちが幸せでなければならない、また、歩ける自然に感謝の気持ちを持たなければならない。そうしなければ100年、1000年オルレは続かないと思ったんです。2007年、初めてコースを作ったときには、各地の点を線にする作業をしてきたんです。100年維持するために、今度はこの線を面にしていかなければと思いました。面にする作業というのは、107の村がオルレにあります。この107の村を全部つなげるのが私たちの目標です。実は自然の中を歩くようにするのはとても簡単な作業だったかもしれません。自然の中を歩くときに歩く人たちに自然保護のキャンペーンをしたり、道を迷わず歩けるようにだけすればよかったのだと思います。でも実はこの道は自然の中だけでなく、村の中や暮らしている地域住民の中にもあります。だからこの道はとても誘導的です。地域の中に入らなったら、私たちは地域の人たちとコミュニケーションを取らなければなりません。地域の人たちと常に話をしながら、コミュニケーションを取り、歩きにきてくれた人たちに優しく、親切にしてくださいと言わなければなりません。また、住民の人たちに何か一緒にやりましょうと声をかけなければならないのです。それで私たちは100年をみるとしたら、1年に1つ2つの村にしばって計画をして、この村にオルレが通ることによって生活水準があがったと、プライドと幸せを感じてもらえるようにしていこうと思ったわけです。それで、済州オルレワークショップといって、地域住民と一緒にやるブランドを行うことになりました。それでどこも同じだと思うのですが、人が生活の中で利用してきた昔ながらのものが一番です。天然染物の才能を持っている人たちから、ファブリック商品のデザイン化をしたんですね。この方たちは、昔から布団とかチマチョゴリの裁縫の技術を持って

いる方たちだったんですけれども、布団も西洋化しているし、チマチョゴリも着なくなつたし、一日に 1,000 円も収入がない状態だったんです。裁縫の技術はとてもあるけど、デザインの技術はないから、お客さんはどんどん離れていっていました。だから、デザインの専門家を派遣して、いいデザインができるように図案も渡し、教育もして良い商品を生産してもらうようにしました。それで私たちも一緒に濟州島の記念品として販売を手伝うようになりました。この村は細花里（セファリ）という地域なのですが、特産品であるハーブで何かできないかと声をかけてきたので濟州オルレと一緒に生産を計画してブランドを作ることにしました。この写真に見えますけど、焼酎やビールのびんとかを活用して、ハーブのキャンドルを作りました。キャンドルを作るのも村の体験ものとして活用しています。ここは緑茶が有名な地域ですが、緑茶で何か新しいものは作ってなくて、緑茶のアイスクリームとチョコを作るように手伝って、村の倉庫だったところをカフェにして、チョコとアイスを販売するように濟州オルレが手伝いました。このように村の新しいコンテンツを作る、地域の宝となるビジネスモデルを作っています。このような作業をすることによって、地域の住民は、オルレコースがうちの村にきてよかったと言うんです、また村にいろいろな人がきてくれることで私たちは幸せだ、収入ができて新しい事業ができて、村に来る人に優しくできて、村に人がまたきてくれて、好循環ができています。村を通るコースの掃除や草刈りや標識の管理など、私たちが村にお願いするとすすんでやってくれます。このように 107 の村をつないでいく、線を面にしていく作業が必要だと思っています。だから濟州オルレの目標としては、100 年後、濟州オルレの事務局がなくても、村の人たちが維持管理してくれるのではないかとというのが私たちの願いです。

濟州オルレが大きく掲げているのが、ローカルとグローバルです。ローカルライジングといえば、村の人たちと一緒にやっていく作業ですが、グローバルといえば、海外からの人が濟州に来て歩いてくれるかが課題です。このように私たちは広報するお金がまったくないので、どのようにすれば海外の人にトレイルを歩きにきてもらえるか、このターゲットとする人たちにコースを歩いてもらえるか考えるようになりました。だから、2010 年から、世界のトレイルを濟州に呼ぶワールドトレイルカンファランスというのをはじめました。その地域の人たちに来てもらって、いろんな国のトレイルの人たちが国に戻ったときに濟州オルレを広報してもらえるようにしました。このように出合った人たちと私たちは友情の道という広報マーケティングをしています。イギリスとかスイスとかいろいろな国と友情の道締結を結んでいるのですが、イギリスのトレイルにいけば濟州オルレの標識が建っている、濟州のコースにはそのイギリスの標識が建っているというお互いに広報するというシステムです。道がない地域、国には、道を地域に作ってあげるという姉妹の道というマーケティングもやっています。最初は九州オルレですね、去年はモンゴルオルレがオープン、今年の 10 月には宮城オルレもオープンします。濟州オルレを歩いた人には、姉妹の道を紹介し、姉妹の道を歩いた人には濟州オルレを紹介するようにお互い PR しています。

濟州オルレは最初は理事長一人ではじめたものですが、たくさんの力が合わさったことで少しずつ完成に向かっていきます。濟州オルレは、修正できてなかったのですが、1,600 人くらいの踏破者クラブがあります、1,000 人のボランティアたち、交通費も払わないボランティアの方がいて、10 社くらいの友達企業、100 の村、地域の住民、1,500 人くらいの個人の後援をしてくださる方がいます。たくさんの人がいるから濟州オルレの道が管理されています。

以上で濟州オルレの紹介を終わります。次に代表的な姉妹道である日本のオルレについてご紹介させていただきます。ありがとうございます。



濟州オルレ

제주올레

JEJU OLLE TRAIL

제주올레

JEJU OLLE TRAIL

濟州オルレ 제주올레

JEJU OLLE TRAIL

- 濟州の海岸に沿って、道草したり休んだりしながら歩く長距離徒歩旅行道
제주 해안을 따라 놀멍 쉬멍 걷는 장거리 도보여행길
- 總26코스(1~21코스、1-1、7-1、10-1、14-1、18-1)425km
총 26개 코스(1~21코스, 1-1, 7-1, 10-1, 14-1, 18-1) 425km
- 1코스当たり平均15~20km、5~6時間所要
코스당 평균 15~20km, 5~6시간 소요
- 車いすコース10区間38km
휠체어 코스 10개 구간 38km



• 自然を逆らえず妨害しない最小限のデザインと標識

자연을 거스르지 않고 방해하지 않는 최소한의 디자인과 표식



제주올레
JEJU OLLE TRAIL

濟州オルレの風景 제주올레 길 풍경



제주올레
JEJU OLLE TRAIL

濟州オルレの風景 제주올레 길 풍경



- 出来る限りアスファルトは避ける
되도록 아스팔트 길은 피한다.
- 失った古道をさがす
사라진 옛길을 찾는다.
- 新しい道を作る際は環境に優しい方法、人工的設置物は抑制する
새로운 길을 만들 때는 친환경적인 방식을 쓰고, 인공적인
설치물은 자제한다.
- 新しい道の幅は1mを超えない
새 길의 폭은 1m를 넘지 않는다.
- 新しい道を造成・補修する時は、軍・民など様々な人力を参加させる
(海兵隊、特戦司、濟州海岸警備隊などが自らオルレ道造成に参加)
새로운 길을 만들거나 보수할 때는 군, 민 등 다양한 인력을
참여시킨다. (해병대, 특전사, 제주해안경비대 등이 자발적으로
제주올레 길 조성에 참여)
- 私有地はオルレが所有せず、通過できるよう調整する
사유지는 올레가 소유하지 않되, 통과하도록 조율한다.



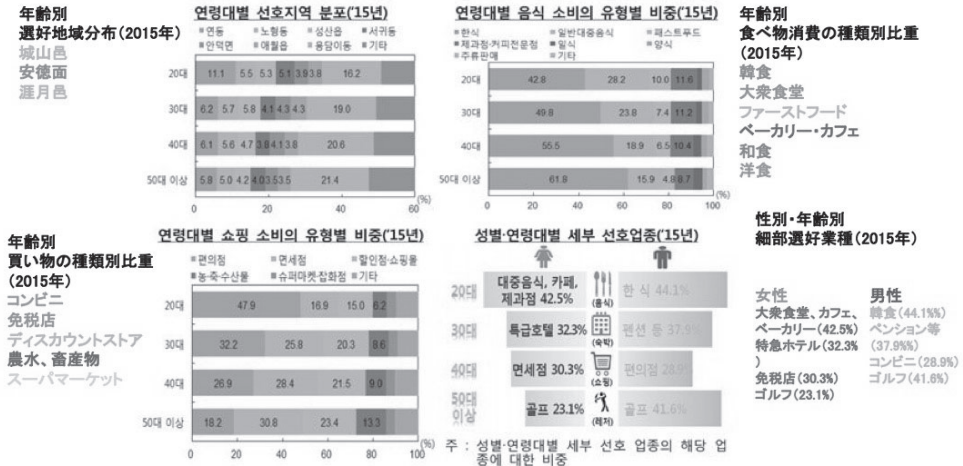
- 短期観光 ⇒ 長期滞在旅行
- 団体観光 ⇒ 個別旅行
- レンタカー観光
⇒ タクシー・バス・レンタカーなど利用旅行
- 手数料観光 ⇒ 自由公正旅行
- 観光地観光 ⇒ 村、在来市場など隔々旅行
- 一回性観光 ⇒ コースの増加、季節の変化に伴い
持続的にリピートする旅行
- 旅行者に新しい姿の濟州、新しい形態の旅行地として
脚光を浴びている
 - 既存の濟州観光を体験した旅行者たち、海外に出る
旅行者に濟州再訪問への強い動機を提供
- 新婚夫婦、中産層以上高所得層、企業人など
- 再び訪れる濟州、親切で人情味あふれる濟州島民
 - みかん、大根、人参など分け合う地域民たち
 - 公民館を徒歩旅行者(オルレクン)の憩いの場に、
オープントイレ無料開放



- 단기 관광 → 장기 체류 여행
- 단체 관광 → 개별 여행
- 렌터카 관광 → 택시, 버스, 렌터카 등 이용 여행
- 수수료 관광 → 자유 공정 여행
- 관광지 관광 → 마을, 재래시장 등 제주 곳곳 여행
- 일회성 관광 → 코스 증가, 계절 변화에 따라 지속적으로 다시 찾는 여행
- 여행자들에게 새로운 모습의 제주, 새로운 형태의 여행지로 각광
 - 기존 제주 관광을 체험한 여행자들, 해외로 떠나는 여행자들에게 제주 재방
문의 강력한 동기 제공
 - 신문부부, 중산층 이상 고소득층, 기업인 등이 다시 찾는 제주친절하고 인심
좋은 제주민들
 - 꿀, 무우, 당근 등 수확물을 나누는 지역민들
 - 마을 회관을 올레꾼 쉼터로, 열린 화장실 개방

濟州オルレが乙・面(日本だと町・村)単位のローカル消費を主導

*カード会社のビックデータを利用した濟州観光客における消費の分析結果(2016年9月発表)



9

제주올레
JEJU OLLE TRAIL

道のために-濟州オルレウォーキングフェスティバル

길을 위해-제주올레 걷기 축제

JEJU OLLE TRAIL



- 코스上に暮らす住民が、코스를歩きに訪れた旅行者のために準備するフェスティバル
길 위에 사는 주민들이 길을 걸으러 온 여행자를 위해 준비하는 축제
- 村は食べものとアトラクション、体験などを準備、旅行者は地域民と交流・疎通する場
마을은 먹거리와 공연, 체험거리를 준비하고, 여행자들은 지역민과 교류하고 소통하는 자리

10

- ・ 濟州の歴史、生態、文化、自然、言葉、食べものなど濟州の自然と文化を統合的に学ぶプログラム
제주의 역사, 생태, 문화, 자연, 언어, 음식 등 제주 자연과 문화를 통합적으로 배우는 프로그램
- ・ 写真、植物、地質、神話、料理、子ども、青少年などテーマ別プログラムと特別アカデミー
사진, 식물, 지질, 신화, 요리, 어린이, 청소년 등 테마별 대상별 프로그램과 특별 아카데미



11



클린올레는 제주올레 길을
걸으면서 길 위에 버려진 쓰레기를
줍는 캠페인

クリーンオルレは、濟州オルレの道を
歩きながら、ゴミを拾うキャンペーン

- ・ 자원봉사&올레꾼&기업의 클린올레 캠페인:
혼자서 또는 모여서 걸으면서 쓰레기 줍기
ボランティア&オルレクン&企業のクリーンオルレキャンペーン :
一人で、もしくは、みんなで歩きながらゴミを拾う



- ・ 그린 리더&올레길 지킴이: 50~60세대의 '괜찮은 일자리'로
활용. 한 달에 10일 동안 올레길에서 표식&환경 정비를 하는
일자리. 시니어 세대들에게 약간의 수입+사회공헌을 통한
자부심을 느끼게 하는 일자리로 활용.
グリーンリーダー&オルレコース守り人: 50代~60代の仕事として
活用. 一か月10日間くらいオルレコースで標識&整備をする仕事. シ
ニア世代には、若干の収入+社会貢献でプライドを感じさせる仕事。

12

제주올레
2 JEJU OLLE TRAIL

道のために-カンセ人形工房組合
길을 위해-간세인형 공방조합

JEJU OLLE TRAIL

• 地域で捨てられる古い布を活用した濟州올레人形

지역에서 버려지는 헌 천을 활용한 제주올레 인형

- CO2를減らす記念品

CO2를 줄이는 기념품

- 地域住民による地域と地球のためのビジネスモデル

지역민에 의한 지역과 지구를 위한 비즈니스 모델

• 濟州の女性と濟州に嫁いだ外国人女性でカンセ人形工房組合を
構成、地域女性の働き場を提供

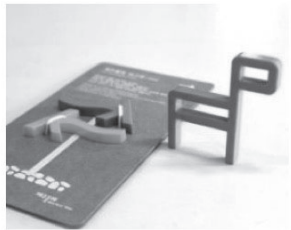
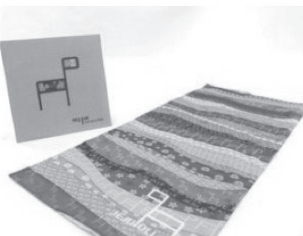
제주 여성과 제주에 시집 온 다문화 가정 여성들로 간세 인형
공방 조합 구성, 지역 여성 일자리 창출

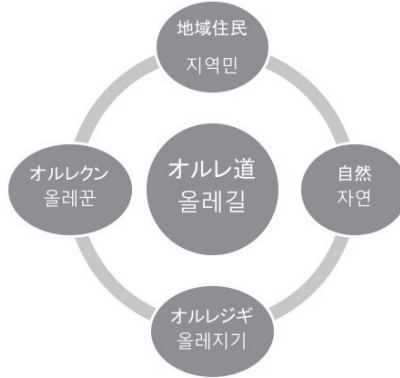


제주올레
2 JEJU OLLE TRAIL

道のために-無意味でかわいくないものは作らない
길을 위해-의미 없고 예쁘지 않은 것은 내놓지 않기

JEJU OLLE TRAIL





点を線につないだのが濟州オルレだとしたら、次の百年は線を面にしていく作業。

107のオルレ村と一緒にするコミュニティビジネスを通して面づくり。

점을 선으로 연결한 것이 제주올레 길이라면, 다음 백 년은 선을 면으로 만들어 가는 작업.

107개 올레 마을과 함께 하는 커뮤니티 비즈니스를 통해 면 만들기.

- ・ 歩く人に歩きやすい道を 걷는 사람에게는 걷기 좋은 길을
- ・ 地域住民に誇りと効果を 지역민에게는 자부심과 효과를,
- ・ 自然には休憩と復元、保全을 자연에게는 휴식과 복원, 보전을
- ・ 올레지기(올레를 지키고, 가이드などを 하는 ボランティア)には持続可能性을 올레지기에겐 지속가능성을

15

2015년 濟州의 마을と一緒に企画、生産、流通する共同ブランド濟州올레워크숍프로젝팅

2015년 제주 마을과 함께 기획하고 생산, 유통하는 공동 브랜드 제주올레 워크숍 론칭

- ・ 背景: 濟州올레의 브랜드를 활용한 地域社会に貢献できる方法の必要
배경: 제주올레 브랜드를 활용한 지역사회 기여 방안 필요
- ・ 目標: 濟州올레브랜드に相応しいクオリティのある地域商品やプログラムと一緒に企画、生産、流通
목표: 제주올레 브랜드와 함께 갈 수 있는 퀄리티 있는 지역 상품이나 프로그램을 함께 기획, 생산, 유통
- ・ 推進方法: 올레코스上にある村または地域企業、地域コミュニティの要請と協議を経て推進
추진 방법: 올레 길에 있는 마을 또는 지역 기업 또는 지역 커뮤니티의 요청과 협의 과정을 거쳐 진행
- ・ 協議の基準: 地域性、地域貢献性、濟州올레との調和、올레꾼便宜性など
협의 기준: 지역성, 지역 공헌성, 제주올레와의 조화성, 올레꾼 편의성 등
- ・ 期待効果: 地域住民には誇りと経済的効果を、올레꾼には旅行に豊かな楽しさを、濟州올레には持続可能性の基盤を
기대 효과: 지역민에게는 자부심과 경제적 혜택을, 올레꾼에게는 여행이 풍성한 즐거움을, 제주올레에게는 지속가능성의 기반을

16

제조올레
2 JEJU OLLE TRAIL

JEJU OLLE WORKSHOP
ソムンオルレ工房組合 서문올레공방조합



- **올레코스に含まれなかったさびれていく在来市場**
올레길로 포함되지 못한 기울어가는 재래시장
- **1階は肉類特化市場、2階は布団、伝統衣装屋など**
1층은 육류 특화시장, 2층은 이불집, 한복집 등
- **天然染物を活用したファブリックデザイン商品**
천연염색 천을 활용한 패브릭 디자인 상품
- **濟州올레의ネットワークを活用したデザインの無償提供と教育、クオリティー検収、ブランド管理、PRマーケティング支援**
제주올레의 네트워크를 활용한 디자인 재능기부와 교육, 퀄리티 검수, 브랜드 관리, 홍보마케팅 지원
- **市場の商人が制作**
시장 상인들의 제작
- **ソムン公設市場と濟州올레記念品売場で共同販売**
서문공설시장과 제주올레 기념품 판매처에서 공동 판매



17

제조올레
2 JEJU OLLE TRAIL

JEJU OLLE WORKSHOP
セファ3里ハーブ村 세화3리 허브 마을



- **7, 8年前に村の造園で植えたハーブ**
7, 8년 전에 마을 조경을 위해 심어 놓은 허브
- **セファ3里は村のブランディングの必要性台頭**
세화3리는 마을 브랜딩의 필요성 대두
- **濟州올레はカンセ人形の多様化が必要**
제주올레는 간세인형의 다양화 필요
- **村で栽培したハーブを利用したアロマカンセ人形企画**
마을에서 재배한 허브를 이용한 아로마 간세인형 기획
- **クリーン올레を通じて収集した空き瓶を活用したアロマキャンドル企画**
클린올레를 통해 수집된 공병을 활용한 아로마 캔들 기획
- **濟州올레의ネットワークを活用したデザインと教育の提供、クオリティー検収、ブランド管理**
제주올레의 네트워크를 활용한 디자인과 교육 제공, 퀄리티 검수, 브랜드 관리
- **村の青年会員がオイル抽出、キャンドル制作**
마을 청년회원들의 오일 추출, 캔들 제작
- **村と濟州올레記念品売場で共同販売**
마을과 제주올레 기념품 판매처에서 공동 판매



18

- 済州オルレ3-Bコース村
제주올레 3-B 코스 마을
- 村で栽培された緑茶を活用した村のブランド化を要求
마을 재배 녹차를 활용한 마을 브랜딩 요구
- 緑茶を活用した商品と販売所造成
녹차를 활용한 상품과 판매장 조성
- 韓国最初のショコラティエのカカオボムのコ・ヨンジュ代表
とミーティング幹旋
한국 최초의 쇼콜라티에 카카오봄 고영주 대표와의 만남 주선
- 新山里緑茶を活用したチョコレートとアイスクリーム開発
신산리 녹차를 활용한 초콜릿과 아이스크림 개발
- 村ではオルレコースに村のカフェを造成
마을에선 올레길에 마을 카페 조성
- 済州オルレは製品開発、デザイン、教育、クオリティー検
収、運営コンサルティング、PRマーケティング支援
제주올레는 제품 개발, 디자인, 교육, 퀄리티 감수, 운영 컨설팅,
홍보 마케팅 지원



19

- 済州オルレ18-1コースの村
제주올레 18-1 코스 마을
- 豊富な海産物を活用した村のブランディング&収益創出
풍성한 수산물 활용한 마을 브랜딩&수익 창출
- 商品開発及び販売所造成
상품 개발 및 판매장 조성
- イシモチ、イワシの塩辛、鯖などの海産物と腕抜き&パ
ンキャップ&塩辛容器など文化雑貨商品企画
조기, 멸치, 삼치 등의 수산물과 토시&팬캡&멸치 용기 등 문
화 상품 기획
- 広告会社オリコムが無償提供でBIとマーケティング企画
광고회사 오리콤의 재능 기부로 BI와 마케팅 기획
- 楸子おじさんの家のオン・オフラインショップを通じて商
品販売
추자 삼촌네 온오프라인 매장을 통한 상품 판매
- 済州オルレは製品開発、デザイン、教育、クオリティー研
修、運営コンサルティング、PRマーケティング支援
제주올레는 제품 개발, 디자인, 교육, 퀄리티 감수, 운영 컨설팅,
홍보 마케팅 지원



20

제주올레 JEJU OLLE TRAIL | **JEJU OLLE WORKSHOP** 세파2리 돌코롬 뽐뽐 세화2리 돌코롬 뽐뽐

・ピョン面セファ2里と一緒に作るみかんブランド

표선면 세화2리와 함께 만드는 감귤 브랜드

・みかんを活用した製品開発及び文化商品

-みかんを利用したデザート、コンピ

-みかん醬油

-ボンボンキャラクターを活用した文化商品

감귤을 활용한 제품 개발 및 문화 상품

-감귤을 이용한 디저트 콩피

-감귤 간장

-뽐뽐 캐릭터를 활용한 문화 상품

・濟州올레4코스に販売所及びカフェ造成

제주올레 4코스에 판매점 겸 카페 조성 예정



21

제주올레 JEJU OLLE TRAIL | **JEJUOLLE WORKSHOP: 올레 스파클링과 간세쿠키** 올레스파클링·칸세크ッキー

- ・ 제주의 용암해수 전문 기업 제이크리에이션이라는 제주올레의 오랜 친구기업, 탄산수를 새로 론칭하면서 제주올레 워크숍 브랜드 라인 출시, 제주올레는 용기 디자인, 홍보 마케팅 지원, 제이크리에이션은 생산, 판매

濟州의溶岩海水専門企業

「Jクリエーション」は濟州올레の友達企業

炭酸水の新発売にあたり、濟州올레とワークショップブランドをスタート。濟州올레は容器デザインと広報マーケティングを支援、Jクリエーションは、生産・販売



- ・ 제주의 베이커리 전문기업 에코제이푸드와는 간세 쿠키 개발. 우도 땅콩과 신산리 마을 녹차, 구좌읍 당근을 활용한 상품.

濟州のベーカリー専門企業「エコJフード」とは、カンセクッキーを開発。牛島のピーナッツ、新山里の緑茶、旧左邑の人参を活用した商品



- ・ 두 제품 모두 수익금의 일부는 제주올레 기부
兩商品とも収益の一部を濟州올레に寄付

22

- 濟州オルレのはじめ、濟州兩行の情報をゲットできる空間
제주올레를 비롯한 제주 여행 정보를 얻을 수 있는 공간
- 濟州オルレワークショップとユニークな濟州の商品を展示・販売する空間
제주올레 워크숍과 유니크한 제주 상품을 전시 판매하는 공간
- 濟州の味を体験できる空間
제주의 맛을 경험할 수 있는 공간
- 濟州市にはカンセラウンジ、西歸浦市には濟州オルレ旅行者センター
제주시엔 간세라운지, 서귀포엔 제주올레 여행자 센터
- 羽根のついたカンセ(濟州オルレ定期後援会員)の力で作られる濟州オルレの道
날개 달린 간세(제주올레 정기 후원회원)들의 힘으로 만들어지는 제주 올레길
- タムドル(石垣の石)カンセの力でつかられている濟州オルレ旅行者センター
담돌간세들의 힘으로 만들어지는 제주올레 여행자 센터



- 칸세인형공방조합, 濟州オルレ道とも、ボランティア70名で構成された(有)ボンナン設立支援
간세인형공방조합, 제주올레 길동무, 자원봉사자 70여명으로 구성된 (유)봉낭 설립 지원
- お得で内容の良い旅行商品企画運営、カンセ人形をはじめ濟州オルレ記念品製造納品、コミュニティカフェ運営を通した収益創出目標
착한 여행 상품 기획 운영, 간세인형을 비롯한 제주올레 기념품 제조 납품, 커뮤니티 카페 운영 등을 통한 수익 창출 목표
- 中年女性のヒーリング旅行プログラム、オンリーユー
중년 여성들의 힐링 여행 프로그램 온리유
- 外国人個人旅行者のためのワンデーツア、A Day Away
Awesome 제주 프로그램
외국인 개별 여행자를 위한 원데이 투어, 어데이 어웨이 어썸 제주 프로그램



제주올레 JEJU OLLE TRAIL

済州オルレ グローバル・プロジェクト



友情の道

海外の有名トレイル団体の各コースを済州オルレコースと友情の道と命名し、広報する交流マーケティング。

※アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリス、レバノン、日本、スイス、イタリア、ギリシャなど

九州オルレ&宮城オルレ

オルレブランドが日本でできた道。(社)済州オルレがコースの開発に関わるアドバイス、標識、デザインを提供。

※九州に21コース、宮城に2コース(2018年オープン予定)開発及び運営

モンゴルオルレ

公的開発の貢献として済州観光公社と一緒に取り組んでいる。コースの開発に関わるアドバイス、標識、デザインの提供。

※2017年6月2コースオープン

WTN/ATN

全世界のトレイル団体が一堂に会し、持続可能なトレイル育成のために協議し、情報を交換するネットワーク。2010年済州で始まり、理事会メンバーとして活動している。



제주올레 JEJU OLLE TRAIL

済州オルレと一緒に作っていく人々 제주올레를 함께 만들어 가는 사람들



- ・(社)済州オルレは、済州オルレを開拓、維持管理する非営利団体
(사)제주올레는 제주올레를 개척하고 유지 관리하는 비영리 단체
- ・1000名あまりの済州オルレ完歩者クラブ
1000여명의 제주올레 완주자클럽
- ・1000名あまりのボランティア
1000여명의 자원봉사자
- ・10社あまりの友達企業
10여개의 친구기업
- ・100あまりの済州の村と地域住民
100여개의 제주 마을과 지역민
- ・1500名あまりの後援者
1500여명의 후원자
- ・100万あまりのオルレクン(年間利用者)
백만여 명의 올레꾼(연간 이용자)





Thank you

